

2024年6月30日

説教題「その日には」ヨハネによる福音書 16 章 22～33 節

主任牧師 加藤 誠

「その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる」(ヨハネ16章26節)、「父ご自身があなたがたを愛しておられるのである」(同27節)、「あなたがたは世では苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(同33節)

先週 23 日はちょうど「沖縄慰霊の日」であり、沖縄に心合わせて礼拝をささげましたが、その礼拝前に行われた少年少女クラスではこんなやりとりがあったそうです。

「沖縄ではたくさんの少年少女たちが戦争に駆り出されていった。もしその時の沖縄にいたら、女の子はひめゆり学徒隊の一人になっていたかもしれないし、男の子は…」とリーダーが語りかけていると、中学一年の男子が「兵隊になっていたかも」と言葉を継いだそうです。リーダーが 79 年前の沖縄の状況を分かりやすく紹介してくれたからでしょうが、中学生なりに「もしあの時に自分が沖縄にいたら」と想像力を働かせる中に出てきた言葉だったのでしょう。平和は、遠い地で起こっている出来事に心寄せて「自分がそこにいたら…」と想像力を働かせることから始まります。その意味で、先週の少年少女クラスの一人ひとりの心の中に、きっと神さまは「平和の種」をまいてくださったことだろうと思いました。

約 80 年前、沖縄戦が始まる 1 年前に、陸軍中野学校卒の将校が沖縄に派遣され、16 歳以下の少年兵による「郷土隊」が組織されました。銃や爆弾の扱い方を教え、森の中でのゲリラ戦の訓練をし、捕虜になるよりも死を選べと手榴弾で自爆する方法が伝授されました。指導した 2 人の将校はいずれも 22 才。かっこよくて優しく、戦争前には訓練の合間に勉強も教えてくれる、少年たち憧れの隊長だったそうです。しかしひとたび沖縄が戦場になると隊長の命令のもとで多くの少年兵が無残な死を遂げました。戦争がなければ、野山を駆け回って遊ぶ少年であり、心優しい青年であったであろう若者たちの人生は「戦争」によって大きく狂わされたのです。

23 日に行われた沖縄の追悼式で朗読された宮古高校三年生の仲間友佑さんの詩に心打たれました。「誰かが始めた争いで、常緑の島は色を失くした。誰のための誰の戦争なのだろう。会いたい、帰りたい、話したい、笑いたい、そういくら繰り返そうと、誰かが始めた争いが、そのすべてを奪い去る」。戦争を始めた責任者たちは安全に守られる一方で、手に銃を持たされた兵士たちは「誰のための誰の戦争なのか」分からずに命を落としていく。こんなにも愚かな戦争をなぜ人間は繰り返すのでしょうか。

聖書は、このような愚かさや悲惨を繰り返している私たちを救い出し、神の国の救いに導くために来られたイエス・キリストを証しするものです。

しばらくヨハネ福音書から聴き続けていますが、今日のこの箇所でも主イエスはた

った独りで人間の悪と闇と対峙しています。律法学者や祭司長、長老という名誉ある地位にありながら、その心の中はカネや力に心奪われて神への畏れを失っている人々、また自分の願いを叶えてくれる救い主は歓迎するけれど、自分の願い通りに動かないと分かった途端に「十字架につけろ！」と叫びだす、どこまでも自分中心の群衆たちと対峙しています。ただその対峙の仕方は、正義の剣をもって人間の悪を断罪するのではなく、自らの命を差し出して十字架で殺されるという方法をとられました。この世界でどれだけ悪魔が吠えたけって神の正義を踏みにじったとしても、けっして亡きものにできない神の真実の愛を示し、最後は神の愛が勝利することを示すために。その神の真実の愛が勝利する日を、16章では「わたしがあなたたちに再び会い、あなたがたが心から喜ぶことになる。その日には…」という言い方で語っておられます。この世界が十字架の暗闇にすべて飲み込まれたとしても「悲しみが喜びに変えられる、その日が必ず来るのだ！」と。

今、大井教会の聖書日課はイザヤ書を読んでいます。イザヤは「主なる神がその愛と正義をはっきりと私たちに示される、その日」を語りづつた預言者です。イザヤは当時、パレスチナ各国を武力で支配する超大国アッシリアとエジプトの滅びを語りました。人々はそんなイザヤの預言をまともに聞こうとしませんでした。「そんなことはありえない！」と。しかしイザヤはアッシリアとエジプトが主なる神を知り、互いに行き来し、共に神を礼拝する日が来る！と語ったのです。なぜなら神はイスラエルだけでなく、今イスラエルに敵対しているアッシリアもエジプトも最終的に救う、愛の神だからです。神の正しい裁きは、悪を打ちのめすだけの裁きではなく、今、神を罵っている人々を神の愛のもとに連れ戻すための裁きなのです。わたしはイザヤ書を読みながら、その預言はまさに主イエスの十字架において実現したのだと受け取りました。人々が「そんなことはありえない！」と笑った、神の真実の愛の勝利は十字架のイエス・キリストにおいて実現したのです。

ただ今朝覚えたいのは、その十字架の愛の勝利は、主イエスの苦しみと悲しみを通して実現したということです。16章22節「ところで、今はあなたがたも悲しんでいる」とあります。二週間前の説教の後で、ある方が「ここで『あなたがたも』となっている、この『も』は何を意味しているんだろうと思いました」と教えてくださいました。そうです。この「も」は「主イエスご自身も悲しんでいる」の「も」です。主イエスはこの直前に何度か「わたしは心騒ぐ」と吐露しながら、「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」（12：27）と語られています。独りで人間の悪と暗闇と対峙し、深く心騒がせ悲しみながらも、父なる神に祈り、私たちの救いのために、私たちが戦争の悲惨から救い出されて神の平和を味わう者とされるために、十字架の道を歩まれた主イエスの愛を今朝深く心に刻み、覚えたいのです。